

令和4年12月2日

嬉野市議会
議長 辻 浩一 様

産業建設常任委員会
委員長 川内 聖二

産業建設常任委員会報告書

令和4年第3回嬉野市議会定例会において付託された下記事件の調査結果を、嬉野市議会会議規則第107条の規定により報告する。

付託事件名 「新幹線開業後の観光まちづくりについて」

【調査理由】

令和4年9月23日に九州新幹線西九州ルートの一部開業で、本市においては念願の嬉野温泉駅が開業した。今後、新幹線を活用して、これまで以上に観光客の誘致に取り組み、観光産業振興の発展につなげなければならないと考える。

そこで、平成23年3月に九州新幹線が開通し、新しく筑後船小屋駅を開業された筑後市に新幹線を活用した観光まちづくりについての調査を行った。

【調査概要】

新幹線を活用した「観光まちづくりについて」の説明及び「筑後船小屋駅舎」と「川の駅船小屋恋ぼたる」の現地説明を受けた。

【調査日】 令和4年10月13日(木) 10時00分～12時30分

【調査場所】 福岡県筑後市役所・筑後船小屋駅舎・川の駅船小屋恋ぼたる

【対応者】	建設経済部商工観光課長	井上 浩二 氏
	建設経済部商工観光課商業観光担当係長	萩尾 拓郎 氏
	建設経済部商工観光課企業対策担当係長	三森 雅之 氏
	建設経済部商工観光課ホークスファーム連携推進担当係長	水田 進 氏
	筑後市議会事務局長	中村 美彩 氏

◇ 筑後市の現状

筑後市は、県庁所在地の福岡市まで高速道路で1時間程度、JRの快速で45分、九州新幹線では25分という近さである。地形としては、山や海がない平坦な所で、人口は令和4年3月末で49,150人、20,347世帯であり、近隣市町の人口が大きく減少している中で、国勢調査人口が増加をしている。

筑後市の中心部は、筑後市役所周辺で、江戸時代に整備された薩摩街道の宿場町である。交通としては、市の中心を南北に走る九州新幹線、在来線及び国道があり、東西に走る国道と交差して九州自動車道が南北に走っている。隣接する八女市との境には、八女インターチェンジが設けられ交通の要所となっている。市内にはJR鹿児島本線の駅が3つと九州新幹線筑後船小屋駅がある。この筑後船小屋駅は、県立筑後広域公園の中にある日本で唯一の公園内に整備された新幹線の駅である。

温暖な気候と恵まれた水を利用して米・麦・大豆などの穀物や梨・ブドウ・苺などの果物とお茶などの農業が古くから盛んに行われている。

観光面では、恋木神社が全国でも珍しい恋の神様として祀られ、全国から多くの方が参拝に来られ、筑後市は「恋のくに」と呼ばれている。大きな観光施設としては、平成25年に筑後広域公園芸術文化交流施設(愛称:九州芸文館)が筑後船小屋駅の隣接地に県により整備された。この施設の設計は東京オリンピックのメイン会場となった国立競技場を設計された隈研吾氏によるもので、交流施設として使用されている。

また、平成28年には、筑後船小屋駅の隣に福岡ソフトバンクホークスのファーム本拠地、HAWKSベースボールパーク筑後がオープンして、令和4年3月で6周年を迎え若鷹を育む自治体として、周辺地域全体がこのチームを核として地域が発展することを期待されている。

このように開業後に新たな施設が開業し、筑後市を訪れる方が増加している現状である。

◇ 新幹線開業後の観光まちづくりについて

平成23年3月12日に筑後船小屋駅が開業し、これを活用していこうということで始まり、それまで筑後市は観光に対して取り組みが薄く、市役所・商工会議所・観光協会がそれぞれ取り組まれていた。それを新幹線の開業を契機に多くの団体に集まって頂き、平成23年に「筑後市観光戦略会議」を立ち上げ、その5年後には第2次筑後市観光推進実施プランとして大小さまざまな取り組みを行われている。

このプランは、『恋のくに～ひと想うまち 筑後～』をコンセプトに、3つの戦略として「“人づくり”戦略」・「“魅力づくり”戦略」・「“筑後のファンづくり”戦略」を行われた。アクションプランとして具体的に「誰がいつ何をやるか」という役割分担を示したもので、筑後市の観光を盛り上げていこうということがポイントだった。一番の要因は、これまで観光に対し各団体がそれぞれに取り組まれていたが、同じ方向を向いて一緒に進めら

れたのが良かったと話された。このプランについては、平成28年度に第1次が終わり、第2次のプランとして平成29年度から令和3年度まで5年間、観光推進に取り組んできた。今後は、観光を取り巻く現状を分析しながら、プランを推進していくとのことだった。

また、市の取り組みと並行し「筑後七国活性化協議会」として広域の枠組みがある。協議会は、筑后市(恋のくに)のほか、柳川市(水のくに)・八女市(茶のくに)・大川市(匠のくに)・みやま市(幸のくに)・大木町(穀のくに)・広川町(果のくに)の5市2町と、これに加えて福岡県及び各市町の商工会議所と連携を図りながら九州新幹線筑後船小屋駅を筑後七国の玄関口として周辺市町の周遊につながるよう取り組みが行われている。

筑後七国は、「筑後七国商工観光推進協議会」が平成23年10月に設立し、これは元々、新幹線の期成会として5市2町で行われていて新幹線開業に伴い、この枠組みで新幹線を活用した商工観光及び産業の経済活性化を図ろうとスタートをした。当時の予算規模としては、当初380万円で、負担金を出し合って取り組んだ。このプロジェクト中に福岡ソフトバンクホークスの誘致があり七国で誘致に取り組まれた。結果、HAWKSベースボールパーク筑後が筑後七国により誘致が出来たので、組織の名称を変えて筑後七国に県にも参加して貰い、「筑後七国活性化協議会」として平成29年から新たに設立した。設立時の予算規模は1,400万円で事業が行われている。事業としては、ホークス球団との連携で野球教室やホークスとのふれあい事業、また、観光では七国でスタンプラリーを開催し、イベントを福岡都市圏で開催され、PR活動が行われている。今年、福岡PayPayドームでのサンプリング活動が行われた。

◇ 新幹線開業がもたらした観光に対する効果と観光客誘致対策について

これまで11年間取り組んでこられた観光客の伸び数の説明を受けた。新幹線開業の前年の平成22年から令和3年までの観光入込客数は、平成22年が、71万800人でコロナ禍前の平成30年に108万3,400人が見えられていた。主だった船小屋温泉は、イベントの行事で、「まかない飯グランプリ」が平成23年から始まり大きなイベントに育っている。その他では、筑後広域公園内の駅前広場が平成23年3月に駅と一緒に開業し、多くの方が見えられている。平成24年3月には、「川の駅船小屋恋ぼたる」が「温泉館」も含めて開業し、約100万人となり以前より30万人程増えている。また、九州芸文館が平成25年から開業し111万5,900人となり、平成28年にHAWKSベースボールパーク筑後が開業したので、それからも多くの方が来ている。新幹線の開業が球団の誘致に大きく貢献し、それが観光客の誘致に大きくつながり新幹線開業前の71万800人からコロナ禍前まで毎年約100万人の観光客が筑后市に来られていた。

最後に、「川の駅船小屋恋ぼたる」の「温泉館」については県の公園内にあり、市の方で整備し運営をされている。一方で、「物産館」は県が直接整備し、市に運営管理を

委託されているが、両施設は一体的に指定管理者制度により運営管理を行われている。

筑後市は今後も観光施設と筑後七国と連携し、周辺地域の特色を活用して事業展開を行っていくと説明を受けた。

【委員会の意見】

筑後市では、新幹線駅が出来るまで観光に対しての取り組みに力を入れて来なかったと伺い驚いた。新幹線駅の開業を契機に観光に対しこれまで取り込まれ、開業後に県や市の観光施設が開業し、近隣市町との観光の連携を図られイベントを行われていた。

なかでも大きな功績として5市2町での取り組みで「筑後七国」を結成し、七国で福岡ソフトバンクホークスのファーム本拠地となるHAWKSベースボールパーク筑後を誘致されている。

当市においても現在、広域組合で多種事業を連携し行っている。その構成市町と連携を図り観光面でも事業に取り組みないかと考える。筑後市も当初、広域で取り組むには温度差があり連携するまで大変だったと話されたが、新幹線駅を有するまちがリードし、事務等を率先して行い他の自治体を引っ張っていけば賛同してくれると伺った。

同じ新幹線駅を有する当市としても、見習うべき点ではないかと強く考える。

また、筑後船小屋駅2階には、球団を紹介するブースと筑後七国の構成市町ごとに特産物や観光名所等を紹介するブースが設置され、広域観光の拠点となっていた。当市でも駅と交流施設が広域観光の拠点となり、また、県をまたいで西九州の最寄り駅になるように他の市町の先進的な取り組みを参考にしながら、当市の観光振興の発展につなげるような取り組みを行うよう期待する。

最後に筑後市では、国土交通省管轄の道の駅ではなく、県が川の駅を整備されていた。当市も以前、民間から轟の滝公園を生かしての川の駅構想を陳情された経緯があるが、当市だけで考えず国や県にも川の駅構想を要望し、新しい観光資源づくりも今後、検討すべきと考える。